

身体感覚を表現する文化の研究  
—身体運動文化における説話の影響を考える—

小田 慶喜<sup>1)</sup>加藤 有香<sup>2)</sup>  
小田 和子<sup>3)</sup>三浦 敏弘<sup>4)</sup>

**The study of the culture expressing body feeling**

—The influences of the narrative form in physical arts—

Yoshinobu ODA<sup>1)</sup>, Yuka KATO<sup>2)</sup>

Kazuko ODA<sup>3)</sup>, Toshihiro MIURA<sup>4)</sup>

**Abstract**

The education of sensitivity affects construction of physical arts. The society of nature and spirit for the life is important for a life of human beings. The most important idea of physical arts is symbiosis with man and nature. The narrative form is told from generation to generation with regards to a life of human. The story of Grimm contains the moral culture of Europe. Analysis of tradition culture is important for an understanding of physical arts culture. The affinity with other living things like animals and the pure nature show the difference of the physical exertion culture of Japan and the West.

1) 姫路獨協大学  
〒670-8524 姫路市上大野7-2-1  
Himeji Dokkyo University  
7-2-1 Kamiohno, Himeji, Hyogo 670-8524  
JAPAN  
2) 兵庫教育大学附属小学校  
〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4  
Elementary School attached to Hyogo  
University of Teacher Education  
2013-4 Yamaguni Kato-City Hyogo 673-  
1421

3) 兵庫教育大学学校教育学専攻幼年教育コ  
ース大学院生  
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1  
Graduate School of Education  
Hyogo University of Teacher Education  
942-1 Shimokume Kato-City Hyogo 673-  
1494  
4) 関西大学  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
Kansai University  
3-3-35 Yamate-cho Suita-City Osaka 564-  
8680

## I. はじめに

身体運動文化の構築には、子どものときからの感性の教育が、大きく影響を与える可能性が高い。人間の生活には、豊かな自然と心が通い合う社会の形成が重要であり、人間の生き方を考え、人間の生活を考えることに通じる身体運動文化を、安定させる基礎となるものである。日常生活の中で体験し、そのなかから生きる知恵をはたらかせ、自然や文化を感じる事が、生きる力を人間に与える基礎となる。社会を構成する隣人と励まし合い、助け合うことのなかに、楽しく、ゆったりとした幸せな身体運動文化の構築を考え、人間が生きることの価値基準を理解することができる。

身体運動文化の最も重要な理念は、人間と自然との共生に基本的理念をおくと考えられるが、この理念は様々な分野および状況によって成立する。特に現代社会においては、人間の身体感覚を重視する教育や文化を軽視する傾向にあり、そのことが人間の健康観や身体運動文化に影響を与えている。地域における伝承文化の衰退や、親子のコミュニケーション技術の低下も、身体感覚を表現する教育の衰微による影響を強く受けている。

子どもの成長に、身体の活動を伴う経験である体験は大きな影響を与える。伴<sup>1)</sup>はモンテーニュの「エッセー」を引用して、「理性と教育は、われわれが好んで信用したがるものであるが、この二つだけでは、われわれを行為に導くのに十分とは言えない。われわれは、そのほかに、経験によって、精神をわれわれの欲するような状態に訓練し、鍛え上げなければならない」と、経験の重要性を示唆している。さらに、「生きる力」の育成を教育目標としなければならない、日本人の身体と身体運動にまつわる生活状況に猛省を促し、誰にでもわかりきっている当たり前の論理の展開をより分かりやすくする方法として、危機に瀕してはじめて、寓話として有名な「イソップ物語」のいつもの結語のように、「ああ、・・・がわからなかったなんて、私は馬鹿者だ」では遅いという、我関せずという態度で日常的に生活をする傾向が昨今の日本人に特に著しいことを指摘し、生活心得の理解の在り方を示している。伴は難解なモンテーニュの古典的エッセイを、人間

が生きるための元気を与え、励ましてくれるエッセイとして理解し、さらに「イソップ物語」という寓話を用いて、より理解しやすく説明を試みている。伴の説明を理解するには、身体運動文化として積極的に寓話を理解する精神文化が重要である。

精神も含む身体を基本において物事を考える教育、すなわち体育は生涯を通じて必要である。甲野と養老<sup>2)</sup>は、大学における体育の教員が、大学における教養としての体育の価値を否定される現状に対して、大学に来て初めて、体育の面白さが分かったといわれるような授業を展開できないのかと、疑問を投げかけている。すでに理解していると考えられることであっても、他の考え方は無いのか、あるいは状況の変化によって異なる理解を示すことは無いのかなど、精神や身体に関する疑問の発現に対して、体育は積極的に取り組む機会を与える可能性が高いのである。教育の領域では、疑問に感じたことを工夫して解決しようと試行錯誤を繰り返し、新たな発想を引き出す努力が必要である。

中島<sup>3)</sup>は、スポーツカウンセリングにおけるカウンセリングのあり方や教育現場における教師の立場を、イソップの寓話「北風と太陽」から説明している。教育現場ではしっかりと防寒具を身にまとっている子どもたちに対し、北風の教員であるか太陽的教員であるかが、指導者の仕事が創造的であるか否かを決定する要因となる可能性が高いことを示唆している。同様にコーチングにおいても、コーチの推進力だけに頼る北風の指導よりも、自分で考えてプレーする太陽的指導の取り組みの重要性を指摘している。北風か太陽かの二者択一の問題ではなく、寓話を文化として活かす取り組みが重要なのである。

教育の現場において、教員は生身の人間に生身の人間が教育をする機会を感じ、積極的に働きかけを実践している。教育は、教育する側と教育を受ける側の相互理解によって成立するものであるが、教育を受ける側の学生は、テレビやパソコン上で流れる映像と同じように考え、生身の人間が語りかけているとは考えていない可能性がある。片岡<sup>4)</sup>は、講義中の大学

生の私語が多い原因を、第一に不本意入学による愛着の欠如、第二に知的好奇心の脆弱さによる落ちこぼれ現象、第三に90分の授業時間に対応できない持久力の欠如、第四にテレビ視聴の影響による講義のテレビ視聴化現象と分析している。これらの原因として、幼児期の感性を刺激する生活経験の不足を指摘し、現行のままでは幼児の五感が危ないと危機感を抱いている。確かに、青少年の道徳感覚の欠如や子どもの体験と遊びの欠如は、乳幼児期の親と子のふれあいの少ない状況が原因にあると考えられる。体育は最も五感を刺激して、豊かな感性を育てることに貢献するはずであるが、体育だけでなく、芸術や文学と互いに協力融合してよりよい環境を導く可能性が高い。

本研究においては、人間の感覚よりも測定器のほうを重視したニュートンの科学だけにたよる身体運動文化の解釈だけでなく、人間の感覚に立脚した説話に関する文化を積極的に考えることにより、人間の身体運動文化の考察を試みた。

## II. 感性を刺激する児童文学

片岡<sup>7)</sup>は、学生が文学作品に対して、せっかく直感した表現の面白さを後退させて、道徳的なことや主人公の心情などをのべようと構えてしまう傾向にあることを指摘している。学校における文学教育の受講体験がその原因で、面白いと感じたことが率直に発表できないような国語教育の存在に疑問を投げかけている。文学作品の粗筋を読みとり、登場人物の心情や情景を読みとり、道徳や人間のあり方を考える読解主義的、心情主義的、道徳主義的な画一的教育が、文学で子どもの論理や分析の力だけを育て、感性や想像、表現の力、さらに情操の育成につながらないことを懸念している。体育においても同様の傾向が認められ、また子育てにおいても感性の刺激という重要な部分を疎かにしているものと考えられる。

黒岩<sup>8)</sup>は、子どもは大人を見て、大人のようになりたいと思い、大人のこと何でも試してみようと努力をして大人になっていくが、その成

長の過程で大切なものを失ってしまうことを心配している。しかし、現代の子どもたちは、大人が持ち合わせていない感性を育てる機会も逸している可能性が高いのである。感性を育てるには、図鑑やビデオでは学ぶことのできない実体験が重要である。さらに体験したことに対して想像力をはたかせて自分のものとし、他の人に話していくことが重要である。体育は体験を想像と表現に結びつける子どもの感性の成長に大きく貢献する。

森上<sup>9)</sup>は、子どものために創作された文学を総称して児童文学としている。児童文学は本来文学の一分野であるが、他の文学と大きく性格を異にするのは、文学の書き手がおとなであるのに対して、読者が子どもであるとしている。したがって、創作に際しては、読み手である子どもの成長発達に伴っての創作方法やテーマ、表現が模索されねばならず、書き手であるおとながどのような子ども観を基盤とするか、また子どもの論理をいかに理解するかが常に問われると説明を加えている。しかし、子どもを対象とした寓話や童話であっても、多くの教訓が含まれており、読み方によっては子どもだけではなく幅広い対応を強いられる可能性もある。

松居<sup>7)</sup>は、子どもにおける聞く力や読む力について、物語という目に見えない世界を、自分の心の中に見えることを可能にするイメージする力のことでありと認めている。子どもは生まれたときから豊かな想像力を有しているのではなく、体験を通して獲得されるものであり、体験が豊かであれば想像力も豊かになることを指摘している。体験は身体運動文化の範疇に入り、多くの身体活動を通じて豊かな体験を蓄積する必要がある。

森<sup>8)</sup>は、文明社会では大人が幼児化しているというローレンツの見解を示して、子どもを社会化するためにつくられた学校や教育が、逆に幼児期を長くして大人になることを遅らせている矛盾を指摘している。また、一方では早熟化による子どもの大人化も問題となっている。言葉や文字を学び、子どもの美的感覚や善悪の判断等の情操教育や想像力や価値観を育てることは、幼児期の子どもにとって重要な課題となる。

萩本<sup>9)</sup>は、豊かな心と知能を育てることを目的として作成された「親と

このふれあい世界名作」のなかで、『困っている子をほっとくのかい』を構成する物語として、マッチ売りの少女（アンデルセン）、白雪姫（グリム）、むぎわらとすみとまめ（グリム）を取り上げ、何が良くて何が悪いかを単純に善悪だけで判断するのではなく、その前のプロセスの大切さを教えることが大切であると指摘している。

松居<sup>10</sup>は絵本を取り上げて、子どもと絵本の関係ではなく、大人と子どもの交わりのなかに絵本が存在することを述べている。人と人との絆をつくりだすものが絵本であり、親と子どもが協力して読みすすめることが、子どもの成長に大きな影響を与える可能性が高いことを認めている。特に大人が読んでもおもしろい絵本は、子どもは大人の何倍もの楽しさを見出し、子どもの時代にしか体験できない感情や物語の世界、知的な世界を味わい、豊かな感性を培うことにつながる。子どものいきいきした反応を日常生活において感じることは、親と子どもに生きる力の再確認を促すことが期待されるのである。

### Ⅲ. グリム童話を中心とした説話としての児童文学を考える

日本において幅広い層に読まれている児童文学は、グリム童話を中心とした物語や童話と考えられる。幼児を対象とした『たのしい幼稚園おはなしあそび絵本シリーズ』<sup>11</sup>は、グリム童話の中から、『おおかみと七匹のこやぎ』、『あかずきん』、『しらゆきひめ』などのあそび絵本を出版している。また斉藤<sup>12</sup>は、3歳から6歳向けとして、『国際版ディズニー名作コレクション2白雪姫』などを出版している。小学校低学年を対象にして、『学年別・新おはなし文庫』<sup>13</sup>として、一年生、二年生、三年生それぞれにグリム童話が選定されている。関根<sup>14</sup>は、傑作愛憎版せかいの名作としてグリム童話の『いばらひめ』を出版している。小学校高学年を対象としては、『世界の名作全集グリム童話集』<sup>15</sup>や『おはなしグリム』<sup>16</sup>も出版されている。このように、幼児を対象としたものから、大人を対象とした『絵本・新編グリム童話選』<sup>17</sup>まで、幅広く出版が試みられている。

「グリム童話のイメージは、世界中の人びとに愛され読みつがれてきた、童話の宝庫……全210話の完訳版全集（全5巻）」これは、グリム生誕200年を記念して、偕成社が出版したグリム童話集につけられたコマーシャルメッセージである。作者のグリム兄弟は1812年に「子どもと家庭の童話」の名前で初版が刊行されて以来、国境を超えて世界中に愛され親しまれている。このようにグリム童話は、ドイツのハーナウに生まれたグリム兄弟（兄ヤーコブJacob Grimm 1785-1863、弟ヴィルヘルムWilhelm Grimm 1786-1859）によって収集された民話である。グリム兄弟は、ドイツのハーナウに生まれ、早くに父を肺炎で亡くし、おばの援助で兄弟ともにカッセルの高校に入学し、兄弟ともマールブルク大学へ進学している。1806年に兄ヤーコブは、ヘッセン国のカッセルで官房見習いとなり、このころから二人で昔話を記録収集し始めている。1812年、グリム兄弟は「子どもと家庭の昔話（グリム昔話集）」第1巻を刊行し、その後第3巻まで刊行されている。このように、グリム童話はグリム兄弟が二十代のときに刊行した昔話集である。この後の1819年、兄弟ともにマールブルク大学から名誉博士の称号を与えられ、1829年に兄弟で隣国ハノーファー王国のゲッティンゲン大学に奉職し、1837年には二人とも大学を免職した後に、1840年にプロイセン国王に招かれ兄弟でベルリン大学において研究を続けることとなる。業績から分析すると、グリム兄妹は文学や歴史に関する研究者なのであるが、童話作家としてのグリム兄弟が世界的に知られている。

高橋<sup>18</sup>によれば、グリム童話集はグリム兄弟の学問研究の一部として刊行されたものであり、子ども向きに出されたものはグリム童話集だけであるとされている。当時、童話は乳母が幼子に聴かせるだけのものであり、本にして刊行する価値の無いものと考えられていた。この時代に、伝承されている古い話の中に、語り継がれてきた民族の存在を感じ、ドイツ民族精神のあらわれのひとつとしてまとめようとしたのは、民族の文化に根ざしているものを研究するという考えであり、高い見識として評価されている。このグリム兄弟の功績が、民話の研究と民俗学への道をひらくことに

なり、民話の採取や研究の基礎を築いたとされている。

グリム兄弟は、ゲッティンゲン大学、ベルリン大学の大学教授職において、「ドイツ伝説集」、「ドイツ文法」、「ドイツ法律古事誌」などを出版しており、文学や歴史に関する研究者としても評価を受けている。桐生<sup>19)</sup> 20) は、グリム童話が生まれた時代の社会的背景を分析している。グリム兄弟によってグリム童話集が出版された1812年は、1806年にナポレオン軍にドイツ全体が占領され、悲劇的な生活が強いられていた時代で、ドイツ民族の統一を言語文化で促そうと考えたと分析されている。確かに、18世紀後半から19世紀にかけては、文学ではゲーテ、シラー、哲学ではカント、音楽ではモーツァルト、ベートーベン、ハイドンなどが活躍し、ドイツ文化は高い評価を受けていた時代であった。過激な民族意識や愛国心の高揚をめざす、ドイツロマン主義が興り、ゲルマン民族の歴史、神話、伝説、民話などに対する関心が高まった時代背景がそこに存在していたと考えられる。

グリム童話集は1812年に発行されて、1819年第二版、1837年第三版、1840年第四版、1843年第五版、1850年第六版、1857年第七版まで改訂されて出版されている。日本語の翻訳は第七版を基準に行われているようであるが、初期のグリム童話集の中には、子どもに聴かせる内容としてはふさわしくないと、同業者や批評家たちの批判を受けて、版を重ねるたびに内容に相当手が加えられていることも事実である。

特に、子ども向けの童話として有名な「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」などは、童話を対象とした精神分析的解釈や歴史的解釈の研究対象として、多くの研究者が注目をしている。伝承物語や口承物語を基礎にした童話には、人間の生き方に対する教訓や風刺が含まれていることが多く、時代背景の分析を組み入れれば、一般的な庶民の生活を分析することが可能になると考えられ、民俗学的な研究も多く試みられている。

グリム童話集の中では、中心となる人物はもちろん存在するが、主役に絡んでくるわき役の存在が、当時の時代背景を代表したり、民衆の生活を代表したり、心理状態を代表しているのではないかと考えることができる。

特に魔女の存在は、読者や聴き手に強い存在感を与え、わき役として一方的に悪者を演じるのかと思えば、話によっては悪者や良者にも変化する存在でもある。その特徴も様々で、とらえ所の無い存在として強く読者の心の中に残ることが多いのである。このグリム童話における魔女像を調べれば、グリム童話において直接表現していないが、物語のねらいを絞り込むことができると考えている。

#### IV. 代表作「ヘンゼルとグレーテル」を理解する

「ヘンゼルとグレーテル15番 (KHM15)」のあらすじは、飢饉が訪れ、暮らしに困った樵夫の一家は、子どもたちを森に捨てる。継母（初版では実母）に言い負かされて、父親は本位ではない子捨てに同意をする。森の奥深くに迷い込んだヘンゼルとグレーテルが、たどり着いた家は、何とパンとケーキで作られていた。二人は夢中になってその家に噛り付く。すると、突然ドアが開き、「石のように年を取った老婆が、杖に寄りかかって這うようにして出てきた・・・老婆は頭をグラグラさせながら」、二人を優しく家に招き入れ、格別のご馳走と快適な寝台を与え親切にもてなす。「ところが、その老婆はただ優しくなふりをしていただけで、実は悪い魔女であった。魔女は子どもたちが来るのを待ち伏せし、子どもたちをおびき寄せようとしてパンの家を作って待っていたのだ。魔女は子どもを捕まえると殺し、煮て料理し、食べてしまう。そしてそんな日が魔女にとっては愉快なお祭りとなるとされている。魔女というものは赤い目をしていて遠くが見えない。でも動物の様に鼻が利き、人間が近付くと匂いでわかる。」魔女はヘンゼルを家畜小屋に閉じ込め、ご馳走を与えて太らせようとする。グレーテルは下女として酷使され、食事も満足に与えられない。ある日、魔女はヘンゼルを食べようと、竈に火を入れる。ところがグレーテルに騙され、竈の中で焼き殺されてしまう。二人は魔女の家にあった宝石を奪い、無事、家に帰り着く。意地悪な継母（初版では実母）はすでに亡くなり、父親は二人の帰りを喜ぶ。宝石のお陰で豊かになり、三人で幸せに暮らす。

というのがヘンゼルとグレーテルの粗筋である。

ヘンゼルとグレーテルの童話の特徴は、ヘンゼルとグレーテルという主人公が二人登場するところである。二人の主人公が登場する童話というのは、児童の理解を効率よく促さなければならない童話においては、理解を複雑にさせるため極めてめずらしいと考えられる。童話において一人の主人公にこだわるのは、おそらく、聴き手側の子どもの理解を複雑化しないための技術的配慮と考えられるが、仮に童話に二人の主人公が登場しても、どちらかが目立たないわき役に転じることが多いのが実態である。もし、童話において二人の主人公を登場させるのであれば、ヘンゼルとグレーテルのように幼い兄妹として、聴き手の側の性差を考慮する方法が取られることが考えられる。すなわち、聴き手の子どもの立場に立って、この年代の子どもの特徴となる主人公への感情移入や、主人公と同一化するための、性差という障害を取り払う方法が試されているとも考えられる。

さらにこの童話を多くの人が分析しているように、「子捨て」の風習も飢饉で食糧が無くなった場合に、できるだけ家族が分散して生き残りをはかる方法としては、当時の人間の行き方を理解できると考えられるのである。現在でも貧困地域には、ストリートチルドレンといわれる子どもたちが多く存在しており、家族から離れて少量の食糧を手に入れるチャンスを増やす悲しい工夫を強いられている現実が存在している。ただ、童話として話す場合、聴き手の子どもたちに、同じ子どもを口減らしのために捨てるという行為を、どのように伝え理解させるかは、読み手の立場から考えれば難しい部分だと考えられ、内容が吟味されることとなる。

子捨ての風習は、この時代においてもやはり強烈に反社会的行為として認識されているようである。このことは、第一版では実母であった登場人物が、第四版からは継母に書換えられることから推察できる。いつかは独立させて離れなければならない、親子の関係をどの時点で切り離すかは難しい判断であるが、ヘンゼルとグレーテルの場合、主人公に自我が確立される可能性が出てきた時点で、家から追い出し子どもを両親からの分離

独立させると考えるならば、当時の一般的な風習として理解しなければならないような気がして、日本における元服の風習と比較でき日本文化における子育てとも関係を考えることができる。

この童話に登場する老婆は魔女であり、お菓子の家に誘って、太らせて食べることを目的に子どもたちを監禁する方法をとっている。つまり、非常に悪者で、殺されてもしょうがないのではないかと思わせるような存在として登場している。最終的には、ヘンゼルとグレーテルに殺され、財産を奪われてしまうのであるが、物語を聴く側からすれば、魔女だから殺しても構わない、略奪しても構わないと思いついてしまふところに、現代社会における教育的解釈としては、説明の難しいところが存在しているのである。日本の昔話にも姥捨山に関する物語が存在するが、実際にはドイツにおいても子どもだけでなく、働けなくなった高齢者も同様の措置を受けたのではないかと考えられる。そうであれば、当時のドイツの森の中には、捨てられた子ども、捨てられた老人、逃げ込んだ犯罪者などの、社会の弱者やはみ出し者が流れ込んでいた可能性がある。

#### V. 代表作「白雪姫」を理解する

「白雪姫53番(KHM53)」の粗筋は、雪のように白く、血のように赤く、黒壇のように黒い白雪姫は、実の母親が亡くなって継母がやってくると(初版では実母と表現されている)その美しさを妬まれる。魔法の鏡が国中で一番美しいのは白雪姫であると断言すると、妃は怒り出し、姫を森に連れ出して殺し、その肺と肝臓を持って帰るよう狩人に指示する。森に連れ出された白雪姫は泣いて狩人に助命を請い、森に逃がしてもらう。狩人は代わりに猪を殺して、その肺と肝臓を城に持って帰る。妃はそれを白雪姫の内臓と信じ、塩茹でにして食べてしまう。白雪姫は森で7人の小人の家を見つけ、家事をする約束でお願いしてもらう。魔法の鏡を持つ妃は白雪姫が森で生きていることを知り、再度殺そうと計画する。物売りに変装して紐を売りつけ、きつく姫の胸を締め付けると姫は倒れてしまう。帰宅した小

人たちは姫が倒れているのを見て驚き、紐を解いてやる。すると姫は生き返る。妃は次に魔女術 (Hexenkunst) を使って毒の櫛を作り、それを白雪姫に売りつける。毒の櫛が姫の頭に刺さると、姫は倒れてしまう。小人たちが介抱して毒の櫛を取り除くと姫はまた生き返る。妃は、毒の林檎を作って白雪姫に与える。一口食べた途端、姫は死んでしまう。小人たちが介抱したが、姫は息を吹き返さない。ガラスの棺桶に入れて守っていると、王子がやってきて、美しい姫を棺桶ごと譲ってくれるよう頼む。家来が棺桶を持ち上げて揺れた途端、姫の口から毒の林檎が出て、姫は息を吹き返す。喜んだ王子は姫に求婚して盛大な結婚式をあげる。式に招待された妃は、真っ赤に焼けた鉄の靴を履かされ、死ぬまで踊らされる。というのが、白雪姫の粗筋となっている。

この話も、ヘンゼルとグレーテルと同じように、初版では継母ではなく実母として登場しているが、第二版以降から継母になっているのである。雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い子どもがほしいと願われ、白雪姫が生まれるが、肌の白、頬の赤、髪の色は、当時のドイツの国旗の色として示されているようである。愛国心を高揚させるためには必要な技術だったことを推察させる部分でもある。

カニバリズムとは人肉を食べる儀式であるが、19世紀のドイツにもその人の肉を食べることで、その人の特質が自分のものになるという民間信仰があったことをうかがわせる。妃は白雪姫を食べることで、自分の中に白雪姫の美しさを取り込もうとしたと考えられるが、童話として聴かせるには、どのように説明すればよいのか困惑する部分でもある。さらに、白雪姫の死体を求める王子の行為は、ネクロフィリアという死体愛好にも通じる場所があり、ますます童話としての読み聴かせが難しくなる部分でもある。最終的には王子と結婚して、幸せになることから、童話としてはなんとかごまかされているが、実際の童話においては、最後に妃の処刑がまた残酷な部分なのである。この真っ赤に焼けた鉄の靴を履かされる処刑法は、中世ヨーロッパで実際に行われていた魔女裁判による処刑法と考えら

れる。すなわち妃は魔女として処刑されてしまうのである。

## VI. グリム童話集の時代背景

この物語の舞台となった時代背景については、16～18世紀の中世ヨーロッパを理解しておかなければならないが、「ヘンゼルとグレーテル」の物語の時代背景とされる16～18世紀のヨーロッパでは、子捨てや姥捨てが頻繁に行われていた時代であるといわれている。不作や不況が相次ぎ、飢饉となると、大勢の人数が生活する大家族では生活してゆけなくなる。そこで、我が子をやむなく森や捨て子を収容する孤児院や、養育院に置いてゆく例が後を絶たなかった時代である。また社会でも、危険な医療行為の中絶よりも、生んでから捨てることを推奨しているという風潮であった為に、現代の一家庭に対する子どもの割合よりもはるかに子どもの数が多かった事が推察される。これは、日本の家族においても同様のことが認められるのである。ドイツの森は、深くて暗く、日本における富士の樹海のようなものであり、一度迷い込んだら、子どもの能力では脱出することは難しかったにちがいない。また、犯罪者や、捨て子、捨て老人等の社会的に弱い人間や、社会から排除されてしまった者達が流れ込んでいた無法地帯であったことも推察できる。ただ弱者が、何とか生き延びるチャンスもまた、森の中に存在していた可能性も考えられる。子どもだけでなく、高齢者も捨てられる運命にあった可能性が高いことから、ヘンゼルとグレーテルは「捨て子」であり、魔女は「捨て老人」であった可能性も否定できない。また、魔女が人食いであると書かれているが、森に住む老婆が産婆としての技術を持ち合わせていたと分析することもできる。すなわち、死産で取り上げた赤子に対する供養としての儀式である可能性も存在している。高橋<sup>211</sup>によれば、墮胎に限らず、産児制限をすることも罪であり、死刑を課される可能性の高い西洋中世のキリスト教社会においては、妊婦の苦しみを和らげるための墮胎の要求を受け入れる産婆を敵視し、さらに魔女として迫害したということが考えられている。ただこの考え方については、同時に

否定的な意見も存在している。魔女狩りが頂点を迎える16世紀から17世紀には、ルネサンス芸術が開花し、近代科学が誕生した時代でもあった。この様な理性重視の社会の幕開けとして、魔女狩りの風習が盛んに行われていったようである。学問の発展やキリスト教の浸透にともない、迷信を排除する動きが強まった事も一つの要因と考えられ、魔女迫害がキリスト教地域に特定される現象であるのは、キリスト教が近代科学との両立を最も積極的に推し進めた宗教であったからだと考えられている。中でも「脱魔術化」を近代ヨーロッパに推進しようとしたプロテスタントが率先して、「脱魔術」「脱呪術」をスローガンに魔女を呪術の世界に封じ込め、迫害したと言われている。ディレンブルク侯国内の魔女火刑に関する論文では、「迷信はあらゆる悪行の原動力であり、いまだに完全に根絶されてはいない」と書かれている。

また、この物語には青少年犯罪が隠れているという説もある。森には既に述べたように、捨てられた老人がたくさんいたとも考えられる。この物語は、森から帰ってきた子どもたちの体験がエッセンスになっているため、森の中で老人を殺害し、金品を奪って帰ってきたという可能性も確かに生じてくるが、森に捨てられる高齢者が十分すぎる程の金品を保持しているとは考えられず、青少年犯罪を持って分析をすることは、あまり納得できない。

それよりも、日本でも若年で奉公先に出されたように、当時のヨーロッパでは、子どもはまず7才くらいで、小さな大人として大人の仲間入りをして、働きに出なければならなかったと考える方が納得できる。ヘンゼルやグレーテルは、日本における元服による大人の仲間入りをする子どもたちと、ほぼ同じくらいの年齢で設定されているのではないであろうか。日本の元服の年齢は、時代や家系によって若干異なるが、概ね5歳から10歳位までであったと考えれば、ヘンゼルやグレーテルの年齢で親から離れて独立を促されても、反社会的行為とは認識されなかったとも考えることができる。

さらに、「ヘンゼルとグレーテル」は、心理学者達がよく引用する物語であるが、実際、精神医療の現場で用いられる心理的解釈が多々利用されている。その一つは、親離れについての解釈であり、子どもが、魔女の家での多くの経験をして、成長でき、より高い発育段階へ進むことができた物語なのではないかということである。また、決定版には、白い鳥に乗せてもらい、大きな川を渡って家に帰るというエピソードが入っているが、来る時にはなかった大きな川を渡るということが、発達段階を一つ上がった心理状態と認識されている。

次に「白雪姫」については、「雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い子どもがほしい」という文章では、肌の白、頬の赤、髪の色は、当時のドイツの国旗の色であり、この三色は文明にも共通して見出される古い基本色と考えられる。また現代とは異なり、男性の地位が優先されていた時代的背景を考えて、父親の心が娘に向かったのではないかと、近親相姦を持ち出す考えもあるが、あまりに深読みすぎて、童話としての創造性が相殺されてしまい、賛成できない人たちが多いのではないであろうか。同様に、妃が執着する本当の事を言う鏡について、鏡の正体は夫であり王ではないかと考える説もあるが、美しくなっていく娘と、更年期で老化していく母との対比を楽しむぐらいの方が、夢があるのではないであろうか。最後に妃は中世ヨーロッパで実際に行われていた魔女裁判の拷問方法で殺されてしまうが、妃の魔女性については次の項目で取り上げることとする。

グリム童話集が初めて世に出た1812年の社会的背景については、18世紀後半から19世紀にかけての時期は、ドイツ文化の一つの絶頂期でもあったのである。だが、その少し前まで、ドイツの文化はヨーロッパの他の国と比べてはるかに貧弱でもあった。それは国が何百もの群小国家に分裂していたことや、三十年戦争によって国土がすっかり荒廃してしまったせいも考えられている。1760年代末から1780年代にかけて起こった、ヘルダーを指導者とし、若きゲーテを中心とした「シュトゥルム・ウント・ドラング」



運動も、19世紀前半に主流で、理性と秩序を讃える新古典主義を排撃し、情熱・空想・個性をたたえ、ドイツ独特の文化の創出を目標に掲げていた。しかし、フランス革命の現実に接するにつれ、革命的な方向性は急速に退き、ゲーテやシラーらは、民族性を超越した、より広い人間性の探求へと向かい、擬古典主義を確立していったのである。同時に、シュトゥルム・ウント・ドラングよりも過激なナショナリズム的傾向をもったロマン主義が勃興し、擬古典主義と共存することとなるのである。ドイツ本国がナポレオンに占領されたために、ドイツロマン派はドイツの国家体制の転覆へと向かわず、民族意識の高揚をめざしたのである。この民族意識・愛国精神が最大の動因となって、ゲルマン民族の歴史、神話、伝説、民話、民謡、ドイツ語などにたいする関心が高まり、グリム童話集も、そうした民族意識から生まれたと考えられる。

このように社会的背景を考えると、グリム童話集は突然生まれたわけではないのである。鈴木<sup>2)</sup>によれば、シュトゥルム・ウント・ドラングの指導者であったヘルダーは、1770年代に文学の原点としての民謡の発掘調査を提唱して「民謡集」(1778~1779年)を出版している。1782年にはムゼーウスが「ドイツ人の民間童話」を、1789年にはナウベルトが「ドイツ人の新しい民間童話」を出版している。また、1808年には、グリム兄弟と同姓だがまったく血縁関係はない、A・L・グリムが「子どもの童話」を出版している。グリム兄弟の童話集が世界中で読まれているのに対し、このもう一人のグリムによる童話集はすっかり忘れ去られてしまっている。

## Ⅶ. 魔女像の解釈から身体運動文化を考える

グリム童話の作品の中の魔女像について考える前に、当時の魔女狩りについて考察する必要がある。16世紀から17世紀にかけては、ヨーロッパ全土で残酷な魔女狩りが行われていたという報告は存在している。火あぶりという、派手なパフォーマンスで市民の注意を集め、神の名のもとに正統性をかざして行われた魔女狩りは、非常に強く当時の人々の心に影響を与

えたことが理解できる。娯楽もなく、毎日の生活苦を一瞬でも忘れさせてくれるくらいに刺激的な魔女の火あぶり刑は、市民にとっては一種お祭りであり、日常を忘れさせてくれる非現実的な体験であり、支配者階級にとっては、民衆の不満を集中させずにはぐらかさせる宗教行事であったこと、容易に推察できるのである。

井上<sup>3)</sup>は科学革命と魔女狩りについて、16世紀から17世紀にかけては、ヨーロッパで全土では、魔女狩りの嵐が吹き荒れており、スイスのジュネーヴでは、3ヶ月に500人が処刑(1513年)、イタリアのコモで1,000人以上(1523年)、ドイツのトレーヴスで7,000人(1580年)、ザクセンでは1日で133人(1589年)、ビュルツブルクで300人(1616~1617年)、マインツで1,000人以上(1611~1629年)、ストラスブルクで50,000人以上(1615~1635年)、イギリスのスコットランドで4,000人(1590~1680年)、スペインでは50,000人以上(1418~1465年)の膨大な人数の魔女の疑いをかけられた人びとが火あぶりの刑などの極刑で殺されていることを報告している。このような魔女狩りによって殺された人の合計は、数十万人以上に達するのではないかと考えられている。

罪もない老婆が、魔女という疑いをかけられ、魔女ということを白状するまで、ロープで吊るされ、爪を剥がされる。万力で骨が砕けるまで締め付けられる。熱した鉄の靴を履かされ、ハンマーで足を叩き潰される。最後には火あぶりの刑や、4頭の馬に手足を1本ずつ縛り付けられて四つ裂きにされるという残酷な行為が行われたのである。イギリスとフランスの百年戦争で、フランスをイギリスから解放するのに貢献したジャンヌ・ダルク(1412~1431年)は、イギリス軍による宗教裁判によって魔女の疑いをかけられ、火あぶりの刑に処せられたのは有名な話である。また、ガリレオが異端審判を受けて有罪になったように、当時のキリスト教教会は、異端に対して制度的対応を確立させていたようである。ローマ教皇は、13世紀後半には異端審問の範囲内で魔女訴追を行うことを正統とする教書を発しており、1489年(1486年という説もある)には、ドミニコ会士でケル

ン大学神学部長のヤーコブ・シュプレングルらの著した「魔女の槌」が出版されている。この著作は、魔女を定義し、魔女裁判の方法を詳細に述べている。この著作によっていままで不明瞭であった魔女という存在が、人びとの前に明確に示されることとなったのである。ここでいう魔女とは、キリスト教と神を放棄し、神の敵である悪魔に身も心も捧げた者であり、神との契約を破棄して悪魔と契約をした者である。逮捕、尋問、証人、判決に至る諸手続きを教えているのである。

異端審問として始まった魔女狩りの背景には、カトリックとプロテスタントとの宗教的対立が考えられる。新旧の両教徒は、お互いを異端者つまり悪魔として非難し合う社会の仕組みができあがっていたのである。魔女として女性だけではなく男性も同じように処刑されていたのである。自分の信ずる宗教の信条と教理から、逸脱する者は死をもって罰する考え方は、キリスト教の歴史の中に存在していることを、日本人は心得ておかなければならない。日本においては、キリスト教に対して豊臣秀吉から徳川家康の時代にかけて行われたキリスト教の弾圧がある。1597年、豊臣秀吉の命令により6名の外国人宣教師と20名の日本人信徒が耳と鼻を削ぎ落とされ、京都・大阪から歩かされ長崎に到着し、十字架にかけられ、槍で突かれて処刑されている。キリスト教迫害の歴史は、ペリーが来航して鎖国政策が終わりを告げるまでの250年以上も続くことになった。

当時のヨーロッパにおいては、ニュートンを筆頭に科学革命期の科学者たちはスコラ学のメインテーマである「自然を解明すること＝神の意志を知ること」の呪縛から抜け出ることが出来ていない状況であった。科学と魔術が区別されるようになる時代が人びとに理解されるようになってはじめて魔女裁判が終焉することになるのである。

このように、人間とは敵と思われる者に対して過激に攻撃を仕掛ける性質を持っているのである。このことは、国が違っても、歴史的年代が違っても、変わることは内容に感じる。現代社会においても、地球上の多くの場所で自分の敵に対して攻撃をしかけている地域や民族が多く存在する。

歴史的に多くの血が流れ、虐殺が行われた事実は何ら人間の精神や行動に影響を与えていないかのように感じられる。

一方で、現代にまで語り継がれているグリム童話集の中の魔女・継母・謙女などは、明らかに当時の風習を映し出している反面、その姿には矛盾も見られる。グリム童話集の中の魔女とは、悪いだけの存在ではないのである。グリム童話集の中の魔女は、人を助け、宝物を授け、おいしい食物を人に与えることもするのである。グリム童話に登場する魔女たちの姿は、グリム兄弟によって、また翻訳家達の手によって、社会を反映しながら書き換えられてきた可能性が高いのである。

西村<sup>24)</sup><sup>25)</sup>によれば、グリム童話集の魔女たちはけっして恐ろしくない者も存在し、一般に思われているような残酷なことなどしていない者もいることを述べている。そもそも彼女たちを魔女という名で一括りするのがまちがっているという考え方である。魔女はひたすら王子さまを待つお姫さまと違い、実に個性的でより現実的であることを紹介している。「ホレおばさん」などの話は、ドイツ人にはとても有名な話で、雪が降ると、今でも「ホレおばさんがベッドを直している」といわれ、人々の生活の中に深く浸透しているようである。ホレおばさんの仕事は雪を降らすだけではなく、糸紡ぎに精を出す勤勉な娘や心がけのいい子を見つけて、素晴らしい褒美を与え、家事を怠けている娘や悪さをする子には厳しい罰を与える。ホレおばさんは、ドイツ人でその名前を知らない人はいないくらい親しい伝説上の女性であるが、ドイツ人にもその正体はよくわかっていないようである。異次元の世界に住む魔的な女性だとか、天上世界に住むゲルマンの女神だとか、あるいは地下に住む死の女神だともいわれている。

西村<sup>26)</sup>は、グリム童話集全部の210話を調べ、その中で魔女が出てくる話は20話であるといっている。そのうち「魔女みたい」と比喩で使われているのと、「魔女だと思った」と推量しているだけを除くと18人となる。その18人のうち、「魔女に魔法をかけられた」というセリフにだけ出てくる魔女が3人いるので、実際にグリム童話集に姿をみせて行動する魔女は15人と

ということになる。魔女と表現されている彼女たちは、果たしてどんなことをしていたのであろうか。

西村に従ってグリム童話集の中から15人の魔女が出てくる物語をあげてみると、「小さな兄と妹」、「ふたり兄弟」、「黄金の子ども」、「藪の中の婆さん」、「森の家」、「トルーデさん」、「六羽の白鳥」、「白い嫁と黒い嫁」、「恋人ローラント」、「みつげ鳥」、「ヘンゼルとグレーテル」、「青いあかり」、「キャベツろば」、「太鼓うち」、「なぞ」の15の物語に登場する。

さらに、推測や比喩として用いられている魔女は、「ブレーメンの音楽隊」、「千匹皮」、「泉のそばのガチョウ番の女」に登場する。姿見せない言葉だけの魔女も「蛙の王様」、「鉄のストーブ」に登場してくる。

白雪姫の継母の妃のように、ねたみで凝り固まって、何度も殺人を繰り返すことによって、身体は妃であっても、心が魔女へと変わっていく場合も、魔女と考えられる。しかも、白雪姫に登場する妃は、最終的には魔女の処刑によって殺されることから、魔女として認識してもよいのではないかと考えられる。実際には、外見的な魔女よりも、心が魔女に変化していく物語の方が、より恐ろしさを感じさせる気がする。

まず「ヘンゼルとグレーテル」の中の魔女像として、まず挙げられるのは、16世紀から17世紀にかけて頂点を迎えた魔女狩りの犠牲者の姿を想像するべきなのではなかろうか。我々の脳裏には、どうしてもあのディズニー版グリム童話や、数々の絵本の中の醜い老婆のイメージがステレオタイプ化されてしまう傾向にある。魔女像と実際の魔女の描写は、多かれ少なかれ異なっているのではないかと思えてならない。魔女狩りは初め、異端狩りから派生した。異端者は目に見える形で存在するのに対し、魔女は実在していない。本当に起こったこと、その時代の事実、そして、なぜ魔女が恐れられ、あがめられていたのか。野口<sup>27)</sup>によると、なぜ魔女が恐れられ、あがめられていたのかについて、ただ単に異教徒を弾圧するための政治的手段の為に魔女狩りは行われていただけではないことは明らかであり、西洋の歴史、キリスト教の性格、当時の風習を細かく分析して、判断しな

ければならない。魔女狩りは単なる政治的、宗教的弾圧の為だけに用いられたわけではなく、多くの要因を含んでいるようである。

歴史を振り返ることは、そこから何かを学び取ろうとする姿勢を失わない限り、決して無駄なことではないが、今地球上で勃発している多くの紛争を深く知り、解決をはかろうとするならば、魔女狩りの起こった歴史を分析することは、各種の宗教論を勉強するよりも明らかに効果的であると思われる。魔女裁判は終焉したが、個人の尊厳と自由が認められない世界があることは、人間にとって未だ不幸な状況が続いていると考えなければならぬのではない。現代社会において、魔女狩りがおこったような状況がまた繰り返されているように、人間の叡智に進化はないのかと考えさせられる部分でもある。

#### Ⅷ. 説話が身体運動文化に与える影響

版を重ねることによって書き換えられてきたグリム童話を、再度見直してその残酷な部分をクローズアップした本が、注目を集めている傾向なる傾向にある。由良<sup>28)</sup>や桐生<sup>19)</sup> 20)らの作品がそれである。しかし、グリム童話の残酷な部分は、イーリング・フェッチャー<sup>29)</sup>や倉橋<sup>30)</sup>、野村<sup>31)</sup>らによって、以前から指摘されていたのであり、何も新しいことではない。現代社会においては、残酷さや惨忍さを強調するのではなく、その当時の文化を理解する努力が重要である。

童話や絵本は子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読み語ってやる本だとの考えが存在しているように、大人が子どもに読み聞かせるときに、再度口承文芸としての声の文化や身体運動文化が能力として問われることになる。松居<sup>10)</sup>は、語る大人と聞く子どもが、一冊の本を介してことばの世界を旅すると表現している。大人が子どもに如何に伝えるかが重要なポイントなのである。由良<sup>28)</sup>は、民話や伝説の継承について、それぞれの時代に生きた人々の息づかいを感じ、人々の信仰や自然の厳しさを感じる必要があることを述べている。グリム兄弟は、口承文芸であった声の

文化を文字の文化にすることで、声の文化の流動性や庶民性を固定化したと考えられる。それによって、私たちは中世から近世初期ヨーロッパの道徳観や当時の人々の考え方を理解することが可能となっており、グリム兄弟の功績は大きい。

子どもたちへの児童文学としての童話の提供は、時代背景を理解して当時の文化や生き方を伝えることが重要である。矢崎<sup>33)</sup>は、童謡を取り上げて大人の詩人が子どものために、子どもにわかる言葉で、心を込めてうたをつくることが重要であることを示唆している。児童文学としての説話に関しても、同様の考えが必要であり、子どもたちに何を伝えるかを考えることが重要となる。

キリスト教を背景とした文化の影響からか、グリム童話を中心としたヨーロッパの説話には、自然との一体感が願望としては認められるが、明確には表現しない点、日本における説話との違いと考えられる。自然と一体化する身体運動文化の基礎は、魔力として表現されることが多く、苦慮している点が考察できる。自然との一体感や、大自然における動物との一体化は、動物との親和性や自然との一体性を強く維持したいという日本人特有の意識の在り方については、日本の説話を中心とした分析と比較することにより明確になると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 伴義孝、「生きる力」の再発見－あなたの身体は日本人です－、見洋書房、3-7、1997.
- 2) 養老孟司、甲野善紀、自分の頭と身体で考える、PHP文庫、94-96、2002.
- 3) 中島登代子、スポーツカウンセリング連載16北風と太陽、コーチング・クリニック、ベースボールマガジン社、No.4、40-41、2007.
- 4) 片岡徳雄、子どもの感性を育む、NHKブックス、7-70、1990.
- 5) 黒岩秩子、へびも毛虫もお友だち、教育資料出版会、3-27、1984.
- 6) 森上史朗、柏女霊峰、保育用語辞典、ミネルヴァ書房、356-361、2000.
- 7) 松居直、絵本とは何か、日本エディタースクール出版部、3-12、1973.
- 8) 森隆夫、思考学のすすめ、東京書籍、88-95、1980.
- 9) 萩本欽一、困っている子をほっとくのかいの話、学研、36-65、1985.
- 10) 松居直、絵本の森へ、日本エディタースクール出版部、175-183、2000.
- 11) 武林陽子、たのしい幼稚園おはなしあそび絵本シリーズ、講談社、1999.

- 12) 斉藤妙子、国際版ディズニー名作コレクション2白雪姫、講談社、2000.
- 13) 斉藤洋、グリムどうわ二年生、偕成社、2001.
- 14) 関根栄一、傑作愛憎版せかいの名作いばらひめ、チャイルド本社、1982.
- 15) 高橋健二、世界の名作全集グリム童話集、国土社、1995.
- 16) 小林純一、奈街三郎、堀尾青史、おはなしグリム、童心社、2000.
- 17) 野口正信、絵本・新編グリム童話選、毎日新聞社、2001.
- 18) 高橋健二、グリム兄弟物語、偕成社、1984.
- 19) 桐生操、本当は恐ろしいグリム童話、KKベストセラーズ、1998.
- 20) 桐生操、本当は恐ろしいグリム童話Ⅱ、KKベストセラーズ、1999.
- 21) 高橋義人、魔女とヨーロッパ、岩波書店、1995.
- 22) 鈴木晶、<http://shosbar.com/grimm/grimm0.html>
- 23) 井上尚之、科学技術の発達と環境問題、東京書籍、1998.
- 24) 西村佑子、ドイツ魔女街道を旅してみませんか？、トラベルジャーナル社、2001
- 25) 西村佑子、グリム童話の魔女たち－魔女街道を歩く、洋泉社、1999
- 26) 西村佑子、<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/2213/grimm.html>
- 27) 野口芳子、グリム童話と魔女、勁草書房、2002年
- 28) 由良弥生、大人もぞっとする初版グリム童話、三笠書房、1999.
- 29) イーリング・フェッチャー、だれがいばら姫を起したのか、筑摩書房、1984.
- 30) 倉橋由美子、大人のための残酷童話、新潮社、1984.
- 31) 野村滋、グリム童話子どもに聞かせてよいか、ちくまライブラリー、1989.
- 32) 高橋義人、グリム童話の世界－ヨーロッパ文化の深層へ、岩波新書、2006.
- 33) 矢崎節夫、私の中の童謡、ブックローン出版、1993.